金毘羅參詣名所圖會 四

ル 4
236
4

昭和
帙 236
巻 4

若山文庫
書林

金毘羅泰詣名所圖會卷之四

目錄

掠本漁村の圖　江浦山　圓柏岩窟　鳩の岩窟
行人の岩窟　行道場　恐草石　古城の趾　狄又峠
仁保の浦　加茂の神社　天神島　鷲巣山
鶴嶋　亀嶋　平石遊覧の圖　大俎石　小俎石　高麗狗石
瓶石　蟇石　二見の岩　家石　烏帽子石　帆解崎
長磯　寺浦　挑の隈　仁保山妙見社　箱の岬
大濱　積ノ浦　生利の濱花御前　舩越八幡宮　香田の浦
尊澄親王古跡の圖　濤打八幡宮　託磨牧　鯛鰆の漁場
鰆網の圖　浮島神社　辛嶋辨天祠　金島獅々嶋

碧水藏書

見立峠
白河屏風ヶ浦
迦羅津の濱
迦葉羅衛院奥院
浴巾掛松の古木
雨乞地蔵
子育観音
大師産盥
海岸寺
十四橋
寸度津の湊
道隆寺
道隆之塔
鴨の神社
忍ヶ岡
光明菴
榜握清水
法然上人奇特の圖
頼之軍勢指揮の圖
同掛引松
青の山
亀石権現の社
鶏足津
鶏足津の古城
道範寓居の古趾
聖通寺
野澤の水
加持水　揺岩
聖通寺山の古城
川津の梅の圖
飯の山権現の社
光顕寺強力の圖
坂出の濱
筏石
産湯の水
熊手八幡宮
鎮守妙見祠
塩屋の天神
田潮八幡宮
小鳥明神社
道揚寺
巖の薬師
飯の山
飯の神社

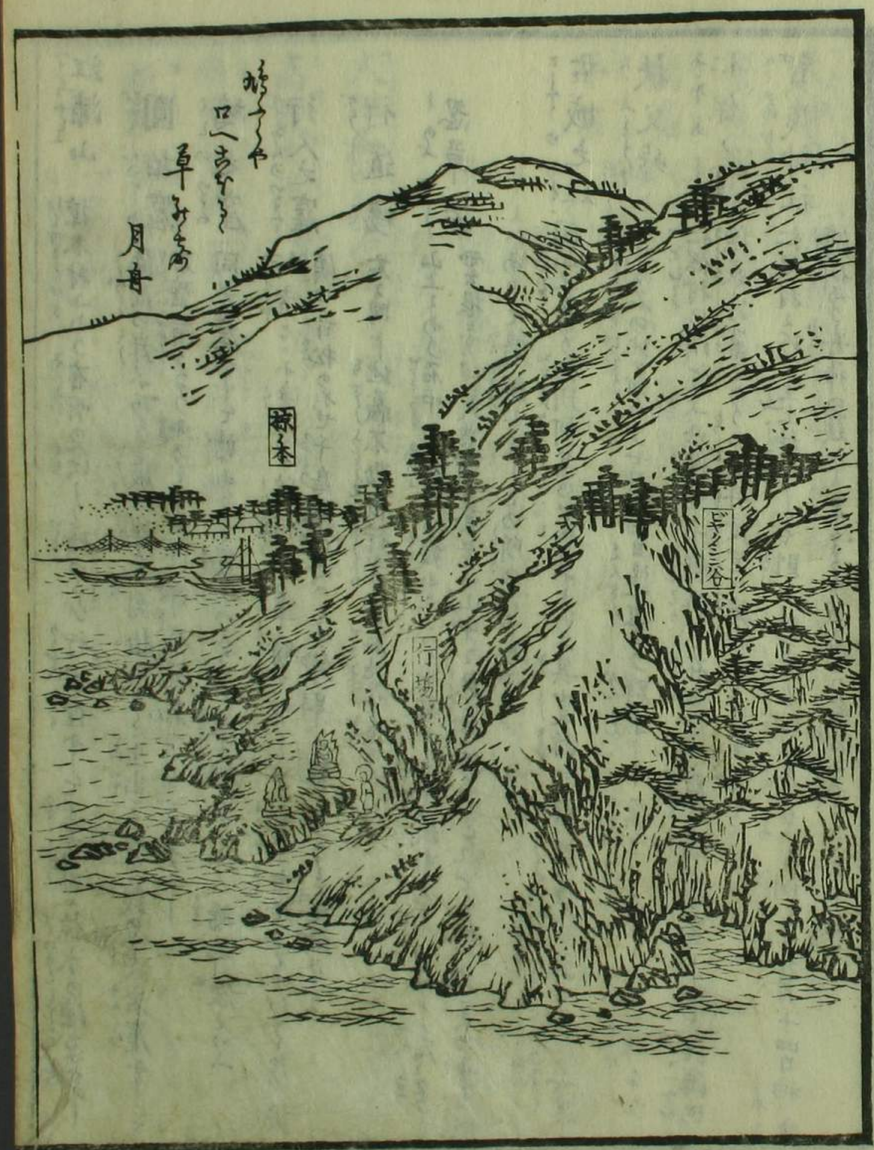
魚の御堂
八十八の水
地蔵堂
悪魚退治の圖
水源薬師堂
金山権現祠
横塩の神社
妙成就寺
崇徳天皇社
四脚の鳥居
福江大師堂
遍照院
永聞持石
白峯の古城
二十六騎討死の趾
清氏討死の圖
閼伽井
底無川
五夜ヶ嶽
雲井御所の四趾

掠本浦里

掠の本とゝるい江浦山の麓の海辺ゝ漁夫の家多〳〵江浦山の海崖を巡詠すんと欲せ

漁船とかゝ〳〵行べし

寄景の岩窟を多〳〵



金四ノ一

江浦山　掠本村ふあり有明の浦より磯づたひ行程僅ふと至る襟へ掠本の漁家多し

圓柏窟　海面の岸ふ巧う巖の崎より圓柏わまと生出る繁茂の下ハ岩窟ふして石壁滑うう此のこるくゞ奇石怪岩つゞくゞ

鳩之窟　同岩窟ふして婦あること巣とつくゞ此ニ栖わる土人婦部屋とゝ

行人之窟　行者こゝふ来つゞ修行とる事時々ひとりゝ実ふ世塵とゝしたゞ波濤の音松のふぜ千鳥踏のこゝの外耳ニ触くのうゝ出地なり

行道場　右ニ同ゞ地蔵不動役行者ふの石像と並なり

忍草石　山上ニあり石中ニ忍草の紋わりのづと破ても手紋わりのづと号く雲根志ニ曰美濃国養老の山中ニ忍草石ありこれとるれば忍草の葉の形ありて最鮮ひらゝこの所のたゞひなり

古城之趾　同山上ニあり細川何某の竜ふとい其支跡亦洋拾遺追考の部ニ委すへし

狭父峠　山上ニ石の地蔵あり七月廿日遠近より群来しゝ詣しゝ上下十八丁の峠なり

仁保ノ浦　仁保村の渓とゝ此浦里千軒許り在家ひの農工商も多くしかゝ海辺ハ漁家垣竈ふあり左へ舟便宜の湊ふしゝ繁昌せり

賀茂神社　仁保村ニひら生土神ふしゝ則ち鳴皇を神宮と称る例ふ九月十四日神輿渡御あり舟祥の類ひ乗ちゝ芝居ニ仕ふあるゝ大ニ盛

天神島　仁保の濱の向ニひら菅公勅諸の社あり濱辺より二丁斗隔ち

鷹巣山庄内鳴ちふ仁保の濱の右の方ニ高ひ

鶴島　仁保の正向にあり　亀島　鶴島の左ニ高ひ島ひり　鶴島より二丁斗隔ち

平石　俗ニ大づと号く　鶴島の傍海中ニひり石の面ひ平ひ凡長八尺斗幅五間余ひり尤面ひつゝ

ゝく巻ゝ如ゝ秋の色深ひ日ハ雅張ゝも比類なき作前ニ勝へ

ゝ波ひり〻〻持後ひひ秀ゝむひり視ふあり奉ひゝ乙ゞまふくゞ栄ゝと

ゝす家ニ国中無双の奇石なり故ニ号ひ国の相撲元の名乗ニ平石

と号ひるひり是ハ内ひ其刀重ゝと称し無双の大石比しなり

大俎石小俎石　平石ニ列る貴人ゝ拵ひ時ハ此石ゝ庖丁の徒料理の場所用ひ

高麗大石　霍島の際ニひり其形狛犬の如ゝ大石なり

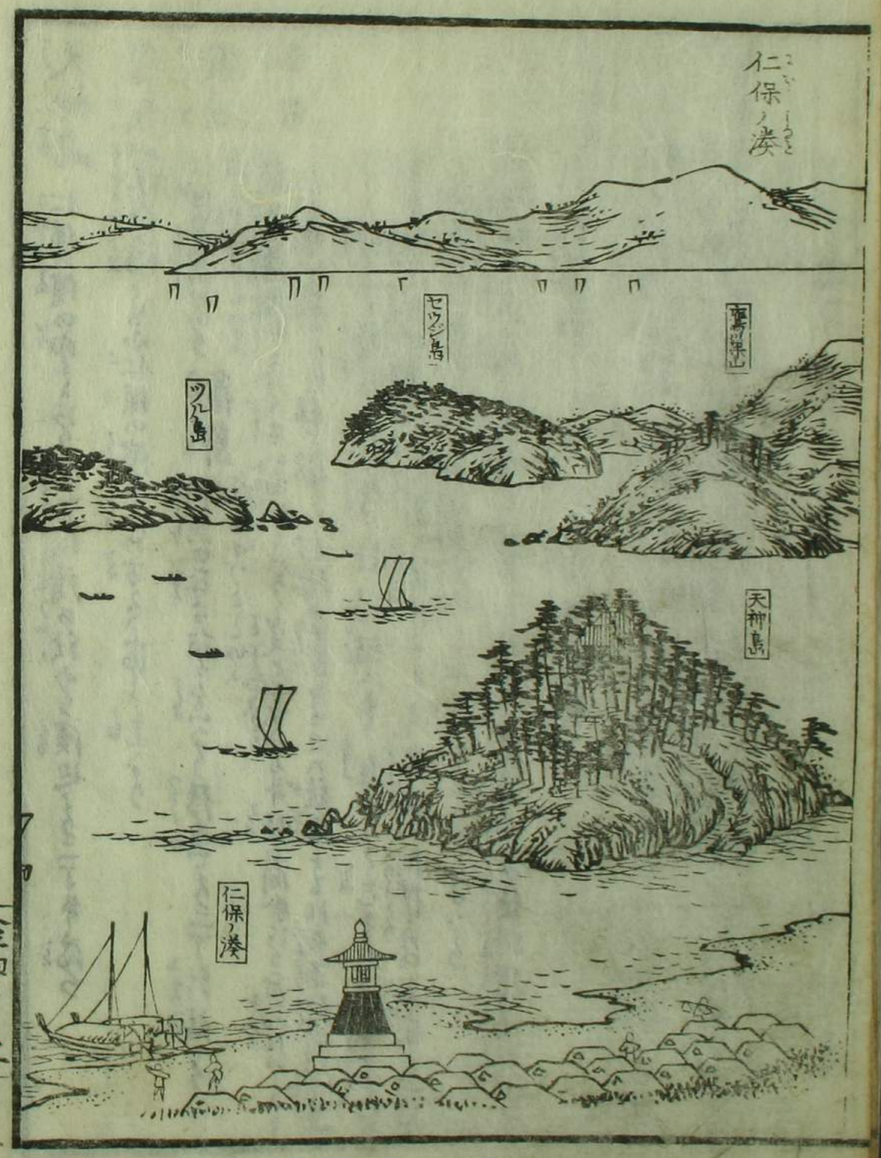
羅石　蠣石二見岩　家石　烏帽子石　彿巨巌なり

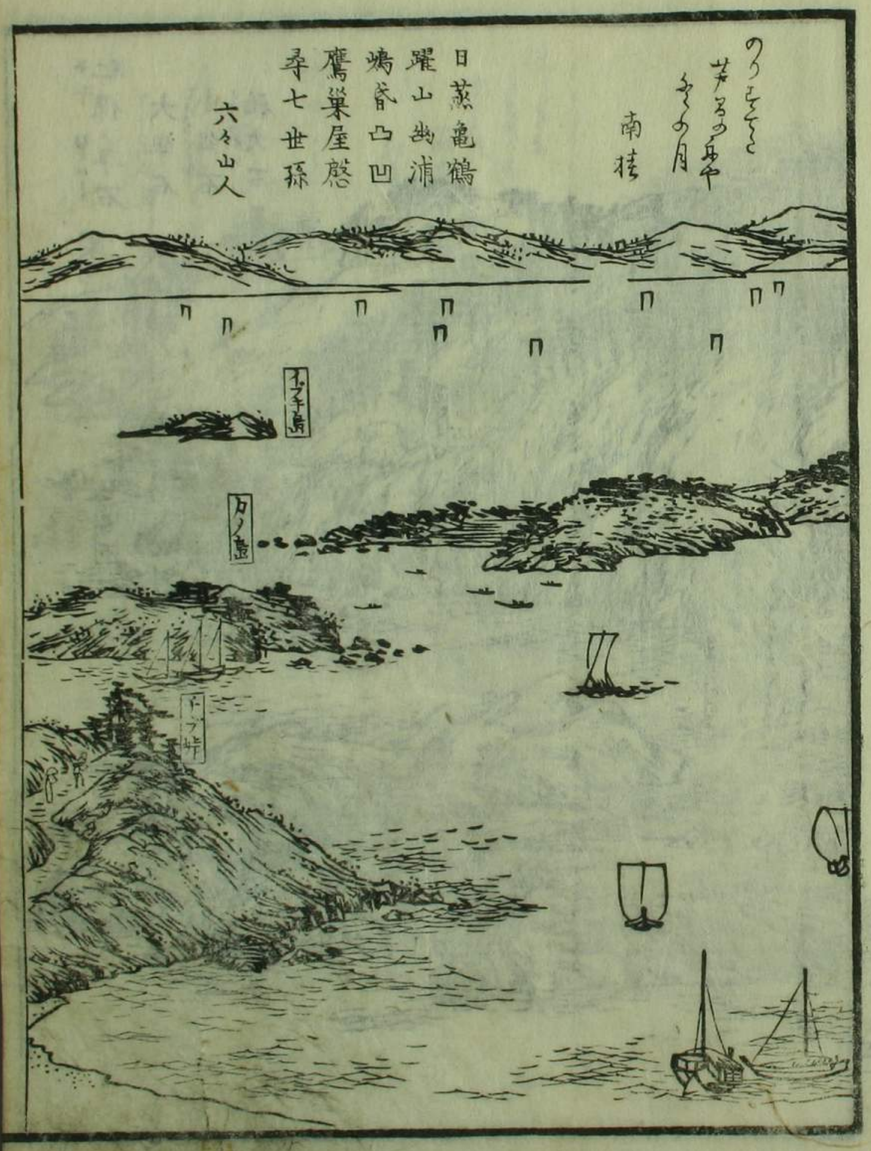
帆鮮寄　長磯　寺浦　桃之限　霍島の廻りにありのづれも其形れ彷

づれ二軒あり耕作ゝ事ゝ漁ゝ仕所ひり妻ひ此浦ニ漁ゝ平

生にあり竈島ハ人家ハ高ひ平原にハ岩ゝ

霍島の名所ひて景地なりおよそ霍島仁保の濱より海上三十丁ひり海ハ雑ゝ魚ゝ人家


仁保ノ湊
セウジ島
ツル島
天柳島
仁保ノ湊


日蒸亀鴉
躍山幽浦
嗚咽凸凹
鷹巣屋愍
尋七世孫
六々山人
南桂
カノ島

仁保ノ平石
大俎石
小俎石
狛犬石
家石
カメ石
見ノ岩
碁石
コマイヌ石
小俎石
狛石

流のこゝをも
おろゝ
哉ゑ代も
居て
抵とゝ
平石のうく
一禅
桃ノ隈
石の上
杜葉

仁保山妙見祠

仁保浦より山上の祠まで凡壮余町あり巨巖重り突出る下の方ふ僅ニ
拝を立て祠の形とゝ成ル左屋根ゝ巖と巖屋根と成甚奇なり山の半
腹ニ鳥居あり登り峠迄の坂ゝ系路及の左の山の峨ニ巨なる奇石あり
大茄子小茄子石瓜石など号くいづれも其形ゝ似たるとゝ称ル霊験
あらたなりて平生ニ祭礼を凌ぎ祈願の絶ル

箱ノ岬

仁保の浦より西北の方にあり本山の麓よりつゞきて其間七里の岬なり
海上ニ突出る支拔羣にして左右ニ入江なり
明神の社あり村中の生土神なり

箱浦と大濱の方ニ侍

大濱積之浦 生利ノ濱 花御前 ともニ岬のかゝ列る

船越八幡宮 大濱村ニ属り村中の生土神なり

祭神 應神天皇 例祭 八月十五日 反橋 なし

拝殿幣殿 橋と隔たる 高良社 末社鍾楼 隨身門 別當之館 ホ

境内ハ列と拝殿の傍ニ男木女木 相生の大松あり

香田ノ浦 大濱より絶向ニ出るあゝ

尊澄親王御旧跡

絶間村ニ属り街道より二丁許入田圃中ニ
碑ニ妙法院尊澄親王御書跡と鐫ル
傍ニ櫻ノ樹を植其本ニ自然石ノ碑を建る
流れても朽ぬむつの月の舟と動を
下の方土中ニ
埋もゝ俳名空ゝ

正慶元年三月
後醍醐帝御謀叛ニ
隱岐の国ニ流されを給ふ
其時尊澄親王もゝ
當国ニ流され給ふ
則ち此詫磨の浦里ニ
座ゝ愁ひ給ふ支
太平記ニ

海辺近く寄れば毒霧御身を侵し瘴海氣冷く漁歌牧笛は
夕の声嶺雲海月の色そぞろ耳に觸れ眼に遮る袂の衣もと従り御涙
を添る媒とぞ成ぬる

傳云此地の海辺の片鄙なれば誰か御心を慰め奉る者もわらべらが當
郷の生土神濤打八幡宮の別當平生に参り御物語の相人とぞ御えと
慰め奉てしばし其後天皇隱岐の国より御飯洛つき尊澄親王ふも皇
都に飯らを弱ふ是よりく彼別當の僧ふも恩賞と賜てしるん今尚此
社僧と称く捨投と称ん

濤打八幡宮 苑間村にあり當村中の生土神海辺の山に御本社あり蓮りの登数百
段の石階なり拝の鳥居の傍に捨投の館あり

祭神 應神天皇 本地堂 阿弥陀如来

末社 白鬚明神御輿舍鐘楼茶所隨身門ふ社頭に列ん

詫磨牧 今其古跡詳かなる何とも山分なるべし

三代實録曰貞観六年十二月九日一年停廢濱岐国三野郡詫磨牧ヲ

鯛鰆之漁場 大濱詫磨の間捕濱と云所に網と云く漁人夫濱より三里ばかり沖の方
わるい箱の岬より四五余り沖にも漁人是ありこれ塩飽の佐柳島の四ツ家人

鰆を捕ふ流し網と云る具ふく頃い九四五月の頃十月以前に寄り大なる長
長六七尺ゆもぬぎ先漁師魚の集りたると猛しく数十艘の船と列り魚れ
後辺より漕まろうく頻ふ追ふ魚逃まどひく終に疲れ酔ごと其ーた
先に進たる船ふ数石と投る魚はく驚きまどひく道ん取るの時
網を乱ーく一尾も洩さじ網をたりく攬網をくしん取なり

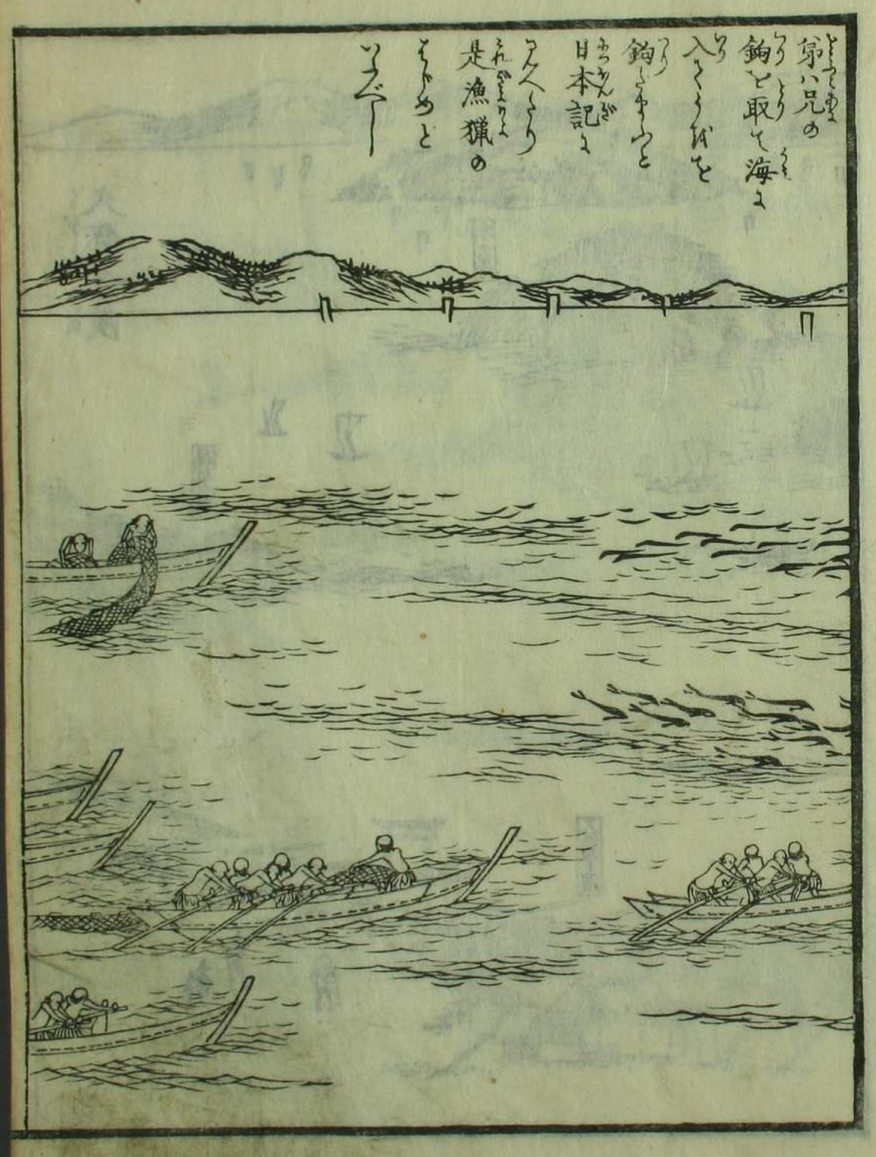
鰆の字俗用にく春月妻く出ると汝く書なふいせるなーんりとの形
腹小く狭ー故ふ狭腹狭腰と称ふ

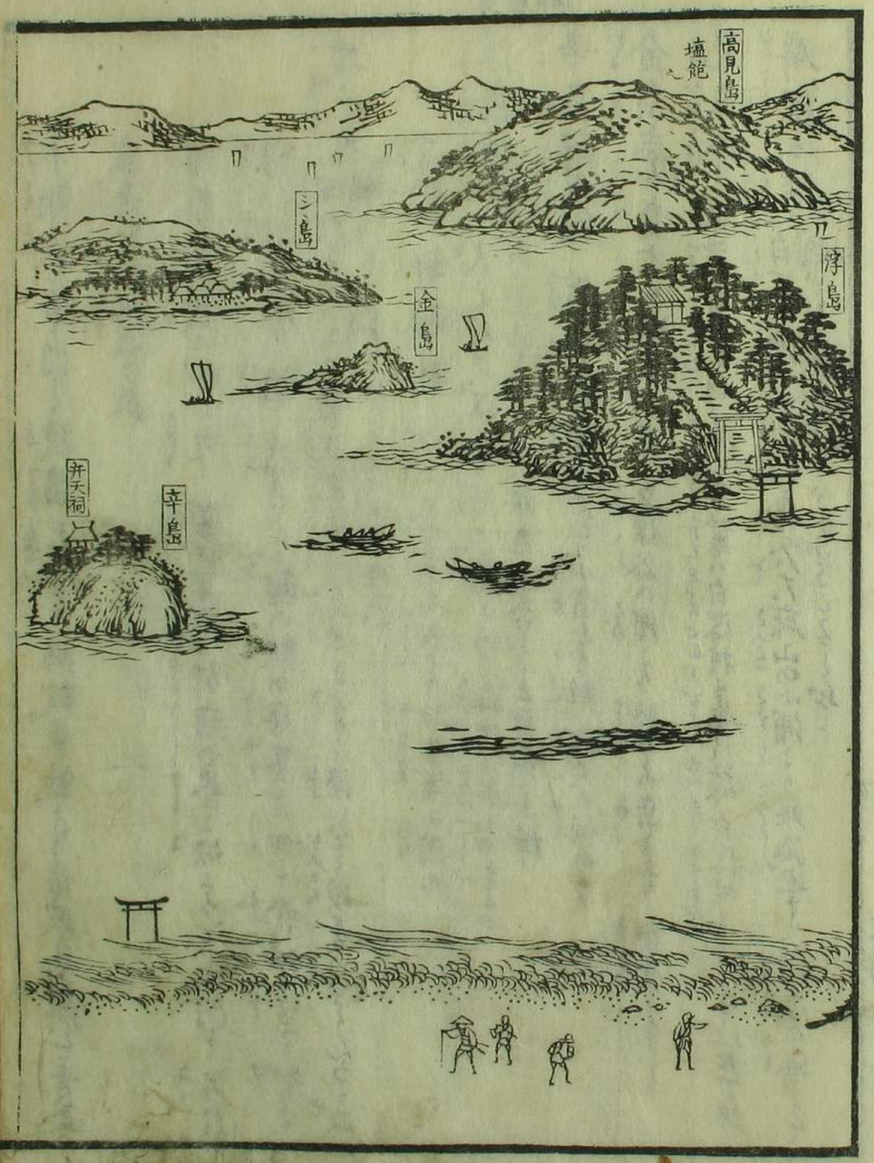
南産志云馬鮫魚青班色無鱗有歯一名章魚 小者曰青魚前

鰆網

魚を捕る者を漁夫と
獣をとる者を猟師と
又漁猟ともふ既に
神代より有り火酢芹命
海の幸を得
弟の彦火々出見尊ハ
山の幸を得
而互に
之を易
兄ハ弟の弓矢を
山に入
獣を猟

弟ハ兄の
鉤を取て海に
入れ
鉤を
日本記に
是漁猟の
始めと





金四ノ八

本朝是を[illegible]く狭腹と云う鱈鮫。章魚。も佐波良と訓ず青鯊
魚是を佐古之と云
唐墨 馬鮫の鰓と乾し製し邑形郭唐の墨に似るを[illegible]名付
味い甘く微し澁し然とも鰯の鰓の唐墨に如ど當地に多く製す
蛟子魚 同所仁保の浦新[illegible]の辺に多く漁る須夏月[illegible]
文字 鮃 鮑 鮸 以上三字よも古より加末須に用ゆ
浮島神社 大[illegible]村久保谷の濱の所に[illegible]海中の孤島なり
山の上に[illegible]土人津島の天皇と云祭神未詳
辛島辨天祠 浮島の左の方に[illegible]島なり辨財天の祠あり
金島志々島木ヶ嵜 いづれも久保谷の濱より眺望の島なり風景[illegible]
見立峠 西葉に見立村に属し東葉に白浮村に属し故に白浮峠とも号す上北丁辨
屏風ヶ浦 白浮の浦より[illegible]大麻山の小浦より此海辺すべて一名の海にて[illegible]

迦毘羅津濱 白浮の濱なり 筏石 同所にあり
経納山迦毘羅衛院海岸寺 白浮の濱にあり弘法大師延寿の古跡なり
奥院 弘法大師幼児之尊像 長凡二尺許 延寿の[illegible]像なり
脇壇 左右に大師の父母の木像 大師三十五才之時作りし[illegible]
四天王 大壇の四方にあり 何れも大師の作なり
大師堂 本堂の傍にあり 正面弘法大師の像 左右某師観音と安置
香川山城守の寄持なり
大師堂の前にあり大師初出の時浴中に平生持て[illegible]
浴巾掛け 木[illegible]の後に沙弥の姿にて拵
雨乞地蔵 [illegible]の時祈[illegible]
子育観音 産水の傍にあり 産湯水 大師延寿の時産湯に用ひし清水
眼病の者これを[illegible]
五岳山善通寺と号す大師延寿の旧地なり[illegible]
古跡なり去支是非詳なし一統に大師の御父佐伯善通多度郡を領し

今の善通寺の地に居住ス此白浮ハ別業なり故に此所にて誕生あり〜もやゝ去

本坊 東院の境内にあり 別に二構の堂舍なり

方丈客殿庫裡大師堂ホなり

海岸寺本坊

迦毘羅津濱

玉景集

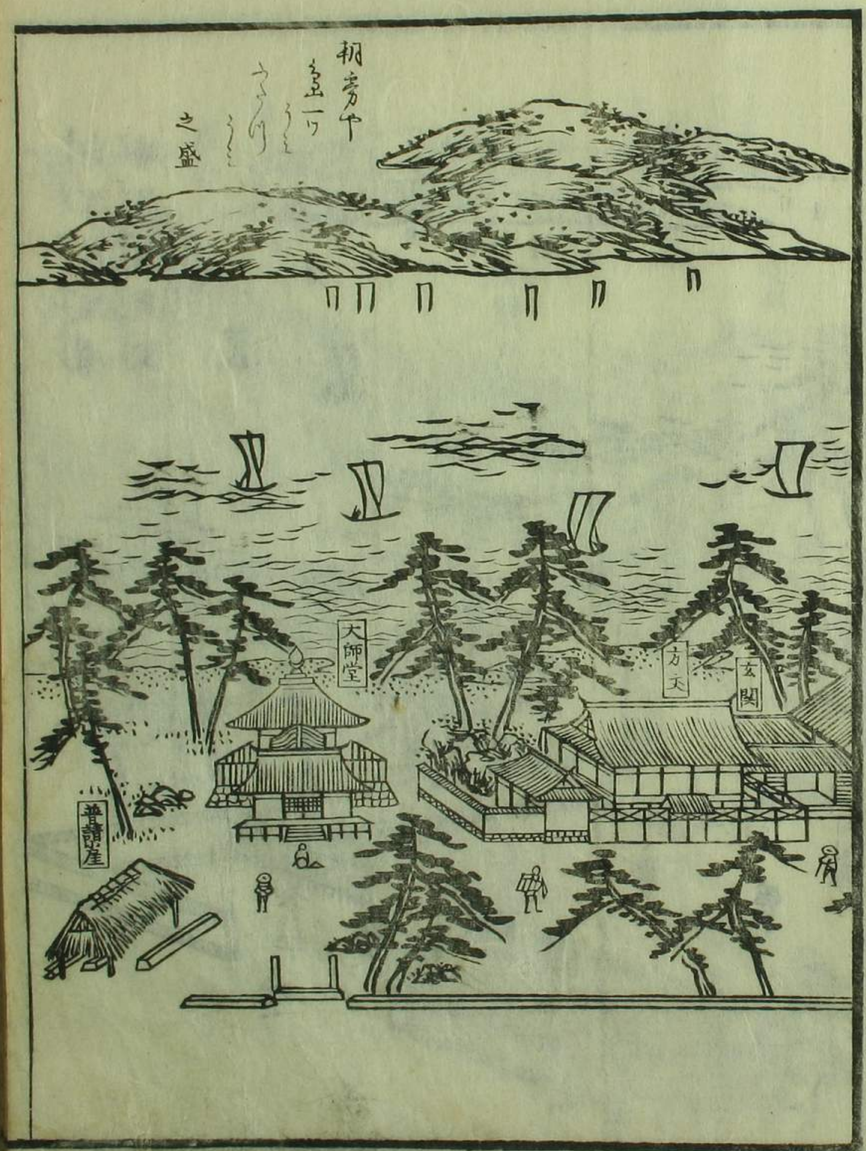
其いこらの浦吹

磯なれ松

かゝらぬ色も

枝ハ

家隆

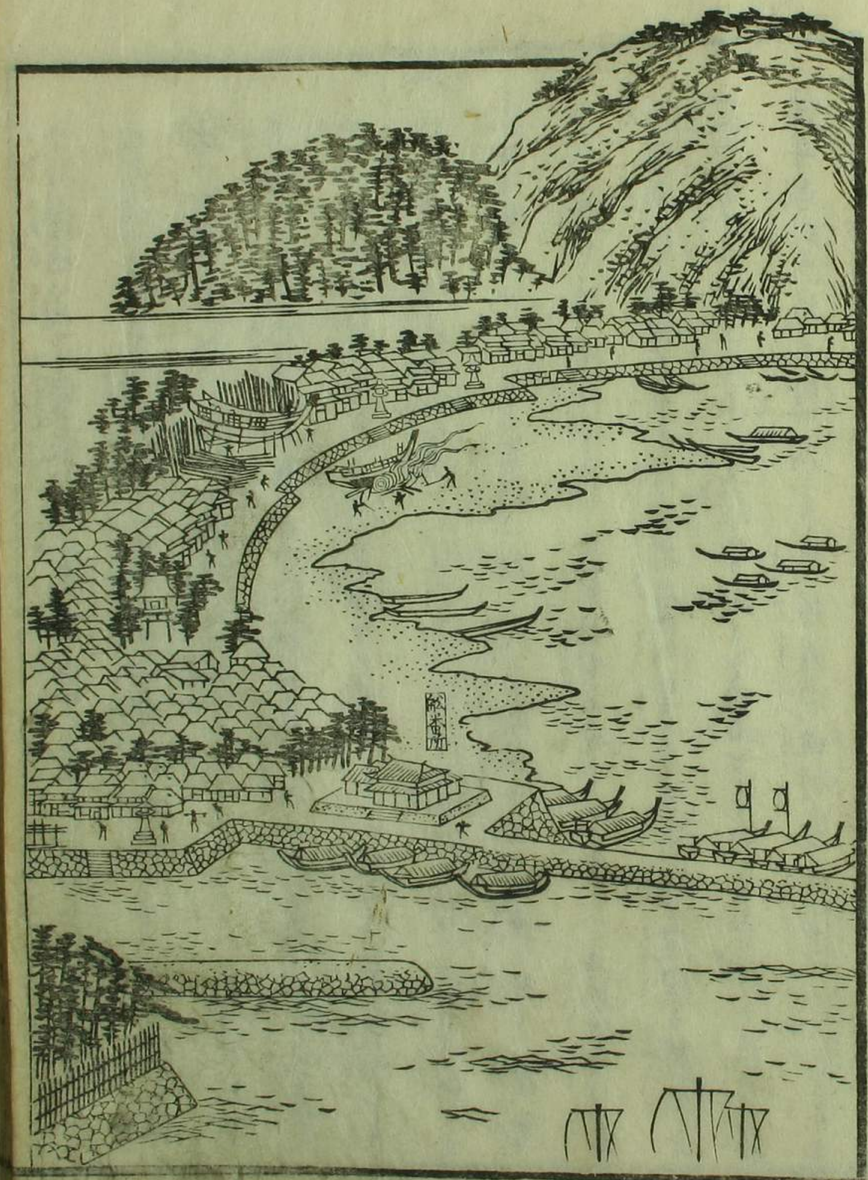


金四ノ十二

熊手八幡宮 屋島浦より多度津街道の傍にあり
多度津より十丁半乾の方にあり
本社 祭神 應神天皇 末社 本社の傍に數多列ん
神輿舍 鐘楼 隨身門 額面に弘法大師産神社とあり
神寶熊手 神代の兵器なりと云
十四橋 海岸寺の巽の方にあり橋の結ぶ石を建る始めは板橋なりしを近世石橋に更む
十 経之營之爰爲石杠石杠維貞
四 橋 不審不崩萬億斯年永福大拜
鋼 寛政五年癸丑初冬 細字不分明之

多度津湊 丸亀の舟着より一里餘西にあり是より金毘羅山へ来る者の行程三里
多度津より多度郡の津なり
此津に圓亀に續くその堅昌の地なり原来波塘の構なく入船の便利よ
きが故に湊に泊る船夥しく濱辺に船宿旅籠屋建つづき或い岸に上酒
肴賣の出店温飩蕎麦の擔賣甘酒煎菓子などあり往来たゆる

事なく其餘諸商人舟大工にして平生振旦且亦西國所往返の法船の門
金毘羅参詣ふさんど徒い此に着船して善通寺と辨へ象頭山に登る
其都合よきとなく此に紀と待せ糸結とるこの多し
来田山明王院道隆寺 多度津より八丁許東加茂村にあり四国霊場七十七番の札所也
本尊 薬師瑠璃光如来 立像の長二尺五寸弘法大師作平地東向なり
鎮守妙見祠 本堂の左の傍にあり 大師堂 本堂左の向 鐘楼 茶堂 普清小家 皆門内にあり
二王門 金剛力士の両像を安ん 本坊 二王門の外街道の左にあり
道隆之塔 本堂の裏の方にあり石の五輪なり用基和氣の道隆の古墳なり墳前に標に
加茂村の在家此に次く
石にて道隆親王の塚なり然るに叙まふくに有べし
當寺は人皇四十三代元明天皇の御宇入江に長和氣の道隆と云人ありそれと
啓迪ととい云道隆は景行天皇十三世の苗裔父は那珂郡木徳の尸主和氣善
茂の次男なり嘗て道隆所持の園北加茂の郷にありしを千株の素と極る



多度津

所謂讃岐の国の素園れりし処に其森中に園九一丈五尺の大木あり種々奇怪の変ありしにより此樹を伐て薬師如来の尊像を彫刻すべし小堂を作て安置し且暮にれと信を時に天平神護二丙午年秋七月十五日午之刻年齢九十九歳卒に其後孫朝祐と云人延暦廿二癸未の夏夢の告を蒙て弘法大師に仕へ先祖の変を乞う彼桑佛を求せ奉りて小像を彫刻し大像と大師に請ふ大師其篤信を感じたまひ長二尺五寸の薬師を作り右の桑佛を胎中に納め永世不失の秘計に擬し給て朝祐に真乗に皈し髪を剃て戒を受け世塵を捨て精舎に此本尊を安置し大師を供養し奉て境内標分四所四方を卜め堂塔を建頗る梵風を究めり先祖道隆に変を乞ひ寺号を弘仁年朝祐の道大師を請じ結縁灌頂執行ひ遠近の道俗

隨ひ市を開延る人所せきまで市をなす此時寺を十余宇作り群衆の人を引とる余りに佛法繁盛の區となり真雅僧正命ふ住し給ふ後に平宝尊師も住し給ふ越るに上皇奉賛に羅り殿堂悉く焼亡し

いまを昔に成ぬるとなれども往古の遺具に什宝弥多なり

車をかけ是と畧し

鴨神社 加茂村に在り當村の生土神なり遷宮祭祀に道隆寺より執行し

寺紀 道隆寺 白人皇六十一代村上天皇天暦元丁巳春二月那河郡真野の池の塘損壊する変数度おおよび故に奥憲に詔して地蔵菩薩守明神遷宮を執行ひ

義経寄附状 義経八島合戦の初當社に祈誓をなし給ひ翌年皈城の後神納の寄附状

大般若経 弁蔵坊兵蒙寄附し奉る所なり 右當社の什宝と思平の初録に也む

道隆寺

開田耕筆に象頭山より一里
余の所に道隆寺と云寺に
古墳あり〻道隆親王と
扎を建う親王に必ず誤
中関白道隆公なり〻此寺の
造立主なり即ち寺の号
呼かん
又或曰道隆の古跡は
讃岐国加茂に
明王院道隆寺と云
右両説共に非
當寺の開發い
和氣の道隆と云る人
より起る
道隆寺と号る

支實寺記に
詳なり
後人道隆の
文字同き史
考誤る
又當寺の
建石に
道隆親王と
ありしも
不當なり
世に斯る例
少なし

備中の国に此寺に来
大師の忌日に四国遍路の旅人に
飯菜とこの〻施しる供張に
くるぐと吉備の中山
高きゆゑと伸くるる人
赤曽志留坊

忍ヶ岡　撈堀の傍法屋の天神より東南に行く街道より北へ〻森に行く所とす

塩屋天神　塩屋村ふり村中の生土神とし菅公を祭る

慧日山光明菴　丸亀より五丁許西の方街道の南の傍に行り塩屋村に属し世俗撈堀と云

本尊　阿弥陀如来　始は浄土宗なりしを後真言宗となる故古歌に言ふ所也
安置し仏は常光明真言道場と称し

法然堂　本堂の右の傍に行り園光大師の像を安し

撈堀水　本堂の右の傍石階の下に行り至て清泉湧

傳云往昔法然上人撈堀を穿ち給ふ所の井なり故に此名とも撈堀

と号し惣じて海辺の井水は大概潮の氣を含て鹹く食用に成難し

此井水海を近くして又も頗る清泉にして夏日ふも減ぜず支なくその冷

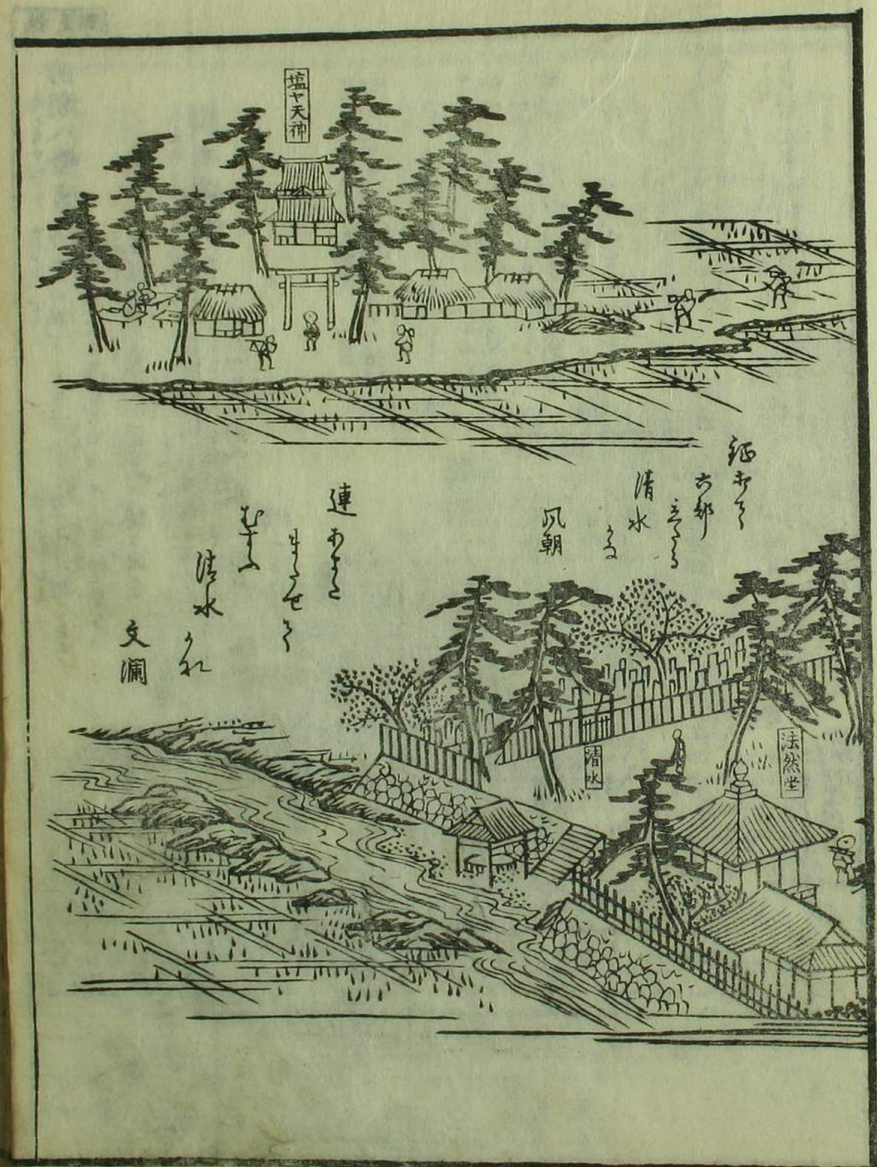
なる支言絶に絶ず街道の傍小標の石を建て狂哥を鐫し

南無ハ船に乗ざい撈で堀清水未の世までも佛くと佛

法然上人撈堀の水

兼元元年春黒谷の法然上人土佐国に流され給ふ然るに讃岐の国ハ月輪殿下の所領なりと以て此国に配し那珂郡子松庄なる生福寺に著せ給ふ其折ふしも在しこの井を穿ち給ふ

光明菴
榜堀之水
塩屋天神
葛の葉の
滝黄く
結る
清水
れ
李西
本堂
茶所


塩ヤ天神
紅葉
清水
風朝
連
清水
文淵
清水
法然堂

田潮八幡宮　九亀の城下より十丁東土器村より
村中うづみ之九亀の市中半土生神より
社頭の圍ハ安〜〜拾遺の編に出る

頼之掛引松

八幡宮馬場先の傍にあり
径凡十五間余土人畧して頼之
松と云

細川右馬頭頼之こゝに陣し
士卒と指揮せし古跡なりと云
細川ハ足利の氏族にして建武の
始細川郷律師定禅當国に
入て旗をあげ国中をとりて
より刑部大輔頼春蹟をつぎ
夫より右馬頭頼之に及ぶ
貞治元年細川相摸守

金四ノ十八

清氏と合戦の時
宇多津に城を築き
其後伊豫の河野攻るに
とゝて此辺軍卒掛引の
場所なり又此より二三丁
傍魚砂と云所に松原の林
いろの土俗駒が林と云是も頼之
味方の駒をとゝめし地なりと

羅山林先生
細川頼之者義滿之輔佐也
其調護之功居多且勸之以平南方
繫九州遂爲四国官轄也
執率之重榮世如之

青之山 鵜足津より當国の名山なり古奇なる青の山風なと称せしは此山なり

小鳥明神社 青の山なる山上なり此所の生土神なり祭日鳥来つゝ御供を喰ひ事実怪しく

亀石権現社 奇津の街の西の端の海辺なり

村老口碑に善云

いにしへ天文十年此浦の未申の方より夜みゝ怪しき光りものゝ海上を照せる事数日ふして漁事なさゞ漁者ども行業を失ひ是を怪しき金毘羅大権現の祈誓とゝけ相勤さ漁者ども毎夜海原を空しく眺め居る折ゝ同年十月十七日夕百歳ばかりの白髪の老翁ありて此汀の亀の形なる石上より此浦漁者ども招き示しきて此方未申の方より光りものゝ象なる山の火災を焼張りまゝ霊験のあらたなる事世に奉ると彼等尊像を彫刻なりて清浄なる安置せよと告終りて失せぬ漁者ども奇異の思ひをなして明るもまゝ則この不可思議を象なる山へ

靖し急ぎ此事と告られば一山の僧俗打おどろき此彼と尋ね奉るに本社の傍に一柱樫なる大木の焼跡の有捜ば大悪の小像魏然として立給へり人々立寄り取おろし一堂に安置し奉るに是則ち今の観音堂の本尊なりされば漁者ども彼願し老翁いとも速に金毘羅神の願況を給へての法利益とおもひ奉るに毎年六月十日と縁日となし亀石大権現と唱へ奉る遠近の村人此おり立給ひし石を走靖し群集する事今に及ぶまで云

鵜足津 鵜足郡にあるを以て号く諸船入津の湊なり商家建つゝ賑ふ

鵜足津城 貞治元年細川左馬頭頼之の地に城を築き相模守清氏と戦ふ清氏の陣白峯の麓なり頼之の陣を宇足津なれば其間僅に一里五丈と寂て寂と送れり

佛光山道場寺 宇足津より四国遍礼第七十八番の札所なり

本尊 阿弥陀如来 座縁長一尺八寸弘法大師作 本堂南

大師堂 本堂の傍なる弘法大師の像を安置

鶏足津湊
道場寺
沖ゝ帆の
夕かすと
烏酔
茶所

玉葉集
尋ぬらん
かれしゝと林の
泊ゝ
秋ゝふくゝ
便りかゝゝや
前大納言爲家
天師堂
本堂
庚申堂
本坊
名木桜
鐘楼

庚申堂　本堂左の傍に有り青面金剛・童子と安置す

茶所　常摂待に庚申堂と云ふ　鐘楼　茶所の向に有り

本坊方丈　本坐の右の傍に有り　名木の桜　樹桜ふしぎに至つて花咲

本坊の前に有り

茶堂庚申堂ホの傍より眺望せば落海漫々として塩飽の島々に漁る船々追風

小走る通船宇足津の泊舟など眼下に有り〳〵風景言ふに絶えり

或曰高野山の道範阿闍梨根来の支に有りて仁治四年當国に流遷せられ

給ふ其始め宇足津の幹橘氏に預け〳〵道範自ら記せらるる中に在家少く

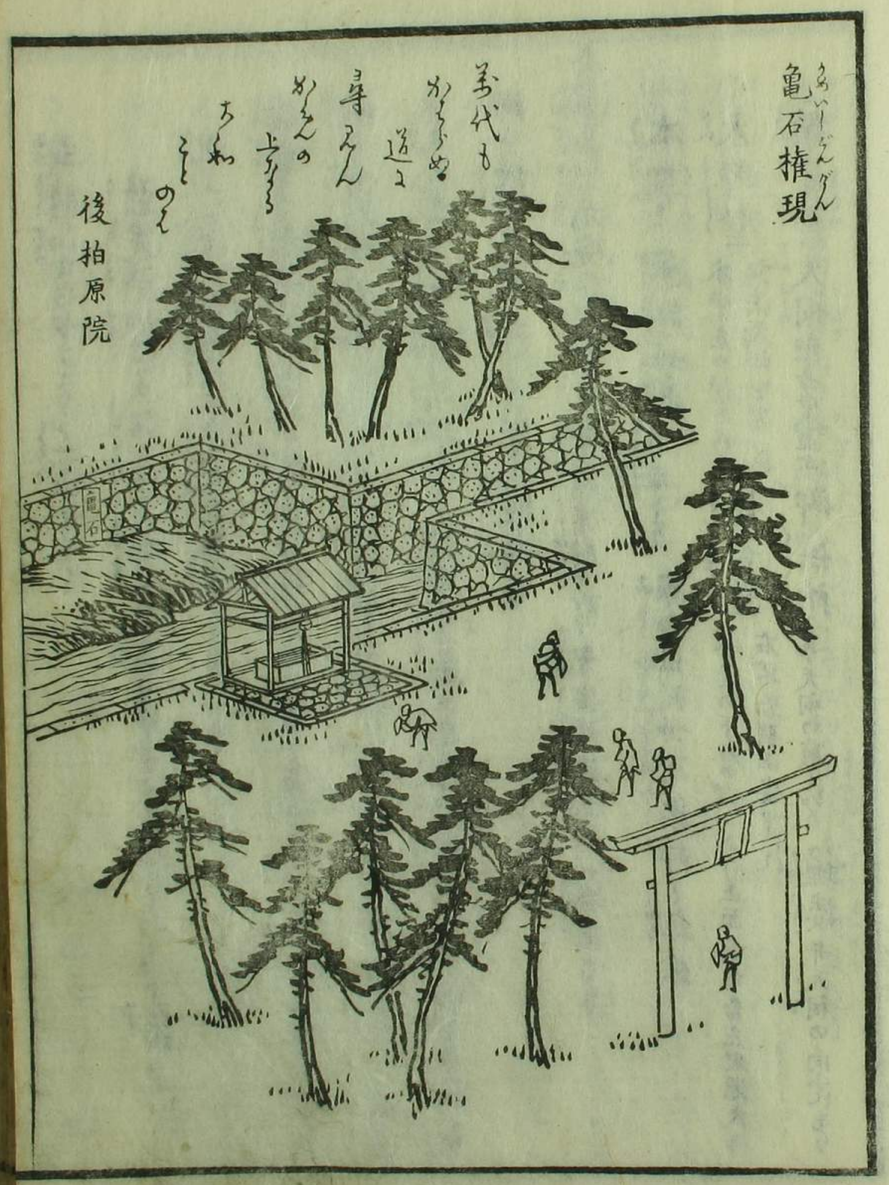
引上げて堂舎一宇僧坊ある所小移〳〵なる此所地形猪の東に望み

孤山夜月を傾け月輪の観を勧め西に向へて念仏遠島夕日を合て日想観

自ら誦し後ハ松山聳へて海中に入る

いちじるしき絶景〳〵杉風の泊り舟すてぬすりなりせば

亀石権現



後柏原院

或時山よのぞりくこんぶ波〳〵

彩足津深この杉の根元を盃のごとくもひくの志

思ふ〻道範寓居の寺ハ蓋此寺なるべしと云〻

圓亀之者永〻四國の霊場を遍礼とる輩ハ當寺を拠て札をとるべし

故之金剛杖を寺より出し上之弥陀観音勢至阿字ホの梵字を記す四句

の文を書く花之数珠札をさゝ足中ゟ厳光慈ホの形せ〻ものを出し遍

路の徒おの〻是をうけ〻順拝を

壺平山宝光院聖通寺　聖通寺村ゟ聖宝理源大師の開基なり

本尊　薬師如来　石像なり　海中出現沖之薬師と称し

大師堂　本堂左の傍ゟ弘法大師と安び　観音堂　本堂の下右の方ゟ正面観世音左理源大師右不動明王安置し

鎮守辨天祠　観音堂並ぶ　御供所　弁天祠の前ゟ　鐘楼　弁天祠の向ふにあり

本坊　境内の右の傍ゟ　野澤ノ水　門外の傍に湧る両流の清泉なり

當寺八人皇五十六代清和天皇貞観十年聖宝理源大師の開基なり則聖宝ハ

當国狭岑郡に生る歳十六にして真雅法師之投し出家し七三論と元興寺の

頼曉に学ぶ金剛峯寺真然および源仁之習し密教の秘奥と稟け貞観十

年故郷沙弥島狭岑同一之法を開うんと給ふに其地狭隘なるゆへ寺院といと

なむに足らざる故之此寺と遷く聖宝の二字と〻〻壺平山聖通寺宝光院と

号し本尊薬師佛ハ其草創の比海中に夜光のりのひかりて恰も燭ごとしその

上に常之雲気ゆり入〻奇異の思ひとなし終之漁人網と下し〻く引之盤石のぬく

ふ〻く動うごく迦ち人水之没し長縄と係く斬り引わぐるゟ石像の薬師如

来なり端厳妙麗ふ〻く慈悲の相と敬を流人驚嘆し遂之草堂と結

く其像を庇ふ今其所と古薬師と〻く斯る奇異の佛像なるとゝ

當寺の本尊とし利益ひろく故に貴賤ともに拜集し澳の業師と稱して尊信し

聖宝其後あとを去て醍醐寺を開き顕密の二教を演べ尽くまた南都東南院を建て三論を講じ寛平二年貞観寺の座主となり延喜二年僧正となる同八年秋七月普明寺に於て逝し時年七十八

巖ノ藥師　本堂の左の山上にあり往昔岩と穿ちし時中より出し故に岩の業師と云富山の奥の院と称し其後の昔平生業蓮するの地に

加持水　岩の業師の麓にあり則ち往昔の傷を世利割松山の半腹にあり巨岩の間より生じ

揺巖　岩の業師より二丁許上にあり九尺丈余人これを動かす巨岩たちまち揺く故に名く

聖通寺山の城　本堂の右の後の山上に古跡あり天正年間奈良太郎兵衛掃部亀丞と

天正六年の夏藤目の城に敵向の條に鵜足那珂二郡の旗頭鵜足津郡

通寺山の城主奈良太郎兵衛尉勝政とあり

當山の聖宝尊師の開基なるゆへ聖宝の二字と
なし聖通寺宝光院と号ス
元亨拾書に曰
仁和三年勅詔なして法河署梨住と称ス
寛平二年貞観寺の座主となり同二年僧正となり
同九年醍醐と称ス官寺なるゆへ聖宝南小
二京を普く遊行して其支配せしを所々と
言ひ東西の二寺醍醐東大寺および興福
寺おなし延喜九年四月に普明寺に
於て病床に労ス故太上皇御幸ア
ひて其仏地とし九月に
月に帰寂せしと云

天正十三年仙石権六衛尉秀久に當國を賜る然るに此國年来兵乱の世
曽我部元親疑望と臣教回戦ひの街とうれく国中馬の蹄に かり田圃荒廃して
芒所となり民庶困窮しく年貢と爾如に故に其張本人を穿鑿して召捕て終
小十三人宇足津聖通山の麓に於く釜と居へて煎殺を斬く是と見懲にとされ
ぐもかへつく民懐ぐりく山間幽谷に逃走るかゑび国中に変ひくん支をおそれく
刑と行ふ支厳重なり尤香東那安原山に先主香西伊賀守が巣穴なり頗
の子女と入置たる匿家なれば山人等是と罪せらるとんらと怖く山中と出て近
郷の民に命じく誘ひく山中と引出し容隠の罪とうて山王安原甚太郎
其下の頭人十二人宇多津聖通寺山の麓に於く磔にかくる其下の凡民百余
人獄門梟に其暴行と見く凡下の輩に四方に逃去るぬ
嗚呼戦国の支に苦しいく臣く怖ろしれば今太平の御恩澤に浴し日に終日

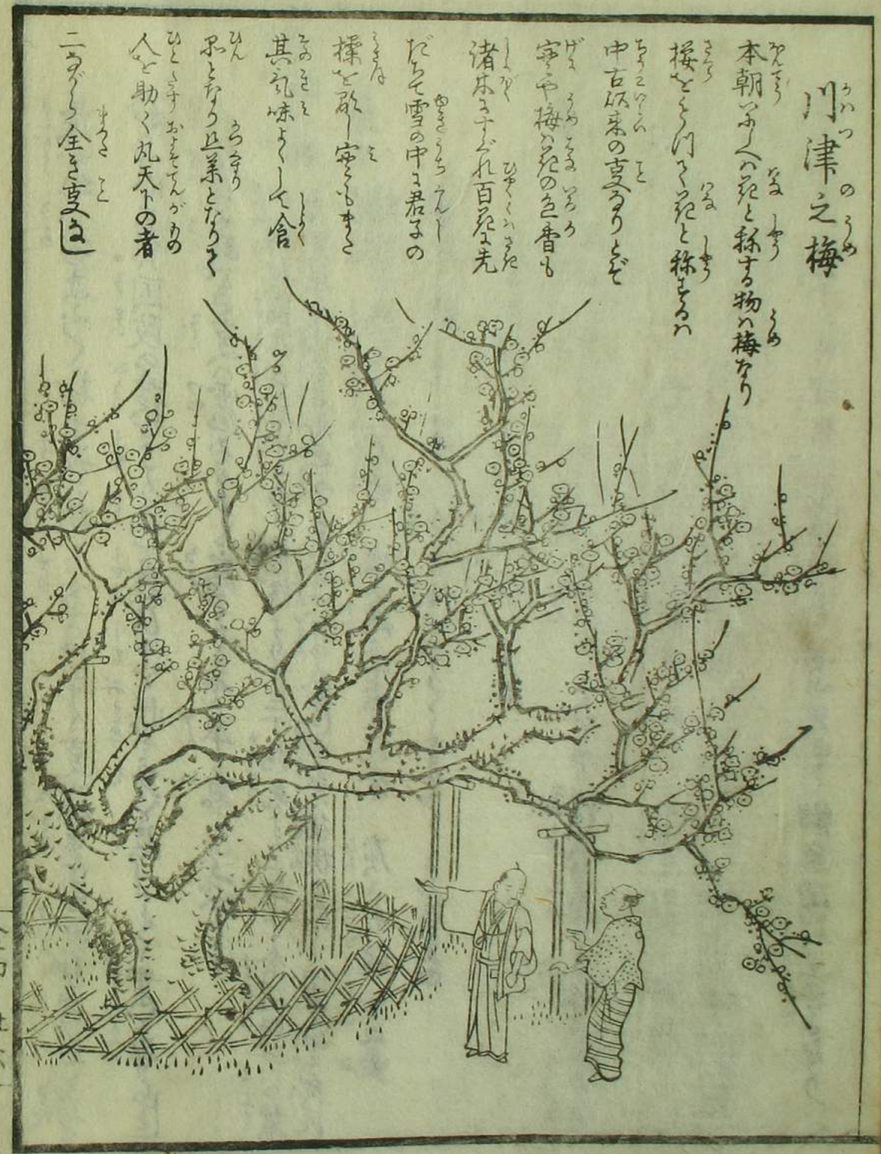
産業とぬのまふく勤め夜に枕と安さにおく支寐ぬも歓び國恩と忘れ
べかゝれば国政の按とちり上と教ひ下と怖と身と怖ろく業と專らと
人の害に成べき支に露ぬるも寫ぐるこれ本意とつべし

川津の梅　川津村高木氏庭中にあり哥津より十三丁九町より三十丁余刈阪の山の麓
古図に云　の先祖に高木右馬之介とよぶる大力の人あり旧家に梅樹あり四方に繁茂し
梅樹の高さ一丈二尺余　本の廻り一丈三尺余　廣さ五畝十五歩
東柱の数　九十六本　今古本となりて昔のごくまれ
天に滿地に満ち　梅の白しいれ

飯の山　川津村の山分なり西国第一の名山にしくと四国遍路の宿に号ぬ　西行
濱波ふかれとや富士といくの山朝けの烟にくれ日もと
飯山権現社　山上にあり濱波の国造鷲住王の霊と祭る安と不動明王茶所佛水安
置の霊ぬり
鷲住王八王十八代廢中天皇の后宮二女の兄なく鄰魚磯別王のなり

川津の之梅

本朝ふつうの花と称する物は梅なり
援とらんさくの花と称するは
中古以来の支なりとぞ
実や梅は花の色香も
渚床さすがれ百尽き先
だちて雪の中に君まの
樣を敬ー実ともまた
其気味よくして食
ふとりの上業となりて
人を助く凡天下の者
二つづつ全き支也



花の支なるは必ず実
ようなれば実のようなる花なり
とり唯梅のみ花雪中に清香
を發して人を感ぜしめ
実はこれ支ありて
人を益するの少かるべ
れ花実を兼備の本と
なるべー手さらば梅をうんと
高木氏のもとにまうしこの水毒月の
上旬なれば既に花実の時を過ぬれど
其幹枝の廣大なるに花の
旬に咲ー間をおどろかんと
おもひやりとく来りて
春をうん支と欲し

飯山

象頭山八景

飯野山積雪

三ッ

高石形き人も
あるきもと
伊豆の山
高根よりけり
雪のあけぼの

金四ノ部七

千村萬落白重々
滿目無山不変容
此日凝粧誰最美
玲瓏天半小芙蓉

謙谷

坂出の川口いとこぶる便宜れ舟着なる奥八津出帆平生に絶ず在中に高松街道の往還なれば旅客の通行る駕の往来ぶく商家建つるとく張りし地なり漢四かい数丁の塩釜続きくなどなり宇多津より凡一里餘来よりあり

其性質強力にして身体壮なり支八尋の屋を馳越て遊行し天皇甚
強力と聞て使を召て是を召し誓の任王に申賤き交を強力の者と友とする
支好て儀則を匡君長に對る支を喜まし再度使を召て召せば従系
来せし其後に殿て力を給ひ年歴て當國に出て那河那に居住し強力の
者を聚め力競を支と壮勇の者を友として相撲をり斯して程に居宅
の巷に依て樂を園造て給ふ誓の任王率て後列致の豪友を亡
跡を暴し社を造て是を求る河内山薩沢是なり其子孫相續て其
所を守る此に喬木の有るや高木を伐て氏と成是より大力の者の出る
支今に絶ず近世の高野山常善提院および高木右馬かもどゝ呼れ
大力者も其裔なり故に剱山と力山とも云 以上南海治孔記に出
傳云往昔當国高松の城下光顕寺の住僧に良純と云る人生得

光顕寺の住僧強力

力わゝ世人日本無双の大力者と称し是則ち高木氏の子孫なりしを
然るに僧こかる巧くを孫と傳ゑ故に怪力の西流らに絶ることゝ云良純或
時修行の為に東國に赴むく物ゝ道と急ぐゝ故に夜深く旅宿と立いゝ
里離れ人かなりゝに道の傍に建る男四五人立ゝ居ゝ容貌声さも其
年饑饉なれば追剥ゝ思ひ行ゝ止まるゝ孫ゝ用ひゝゝんとゝ
彼男やゝ御清路狼狽らんと呼ゝて前後より遮る良純彼男ゝと人傑
に打ゝ投殺ゝん事い安ゝ出家の身まで恐ゝなれぬべしたゞ追拂ゝに
と思ひ並木の松の元まゝりゝると走りかゝて曳ゝ引ゝ根引ゝ
一間ばかり出さけゝ抜出ゝると手に引ゝ打振ゝ捨ゝ松の枝大ゝ鳴ゝ
い吹ぬ風と颯ゝ微塵ふなゝと罵ゝ盗賊ゝ戦慄ゝ人間ゝ
べゝ當ゝ天狗の所為ゝと四方ゝ散ゝ逃ゝ或ゝ馬上ゝ行ゝ

ゝ七すまり程の所ゝかゝ持ゝ振ゝ抜ゝ馬の足並ゝのゝ
ゝ力と出ゝ体ゝ並ゝ二日紹音の禅寺ゝ珍客と清ゝ新ゝ石の水鉢
ゝ良純ゝ迴ゝ来ゝ是ゝ水鉢裏表ゝ変ゝ
甚ゝ苦ゝ居ゝ言ゝ刻限ゝ亭午の時分ゝ既ゝ三十人ゝ
終日ゝ居ゝ巨石ゝ如何ゝ容易ゝ直ゝ得ゝ我ゝ良純ゝ
愚僧ゝ迴ゝ候ゝ黒衣ゝ立ゝ庭ゝ下ゝ石ゝ
ゝ推迴すに始め三十人ゝ八分ゝ
少ゝ霞ゝ迴ゝ得ゝ禅僧ゝ
怪力ゝ公ゝ失ゝ渚辺ゝ石二十石ゝ縁ゝ還俗せ
ゝ所ゝ是全ゝ佛道ゝ障得ゝ今日ゝ水鉢ゝ出さんと言ゝ
ゝ顔色ゝ変ゝ帝ゝ光源寺ゝ面相ゝ全ゝ力ゝ出さんと思ゝ

氣勢ときほこりをなすうこれ又佛心に背くゆえに一度出家となるべき其用あ
らば今より後止らべしやといひ終れば良純これをうけ出家となり
身終るまでかと出さぬ[illegible]と碎王話にくくり

飯ノ神社　飯山の西幕にあり延喜式神名帳出雲足郡二座の其一なり

祭神　一座　飯依彦命　飯の山に至る支宇多津より三里半

魚ノ御堂　坂出より三丁余南新濱村にあり今は僅の小堂一宇なり薬師如来を安し

傳云往古殯留霊公毒魚と退治し給ふ其霊崇りとなり疫疫行る
是を鎮めんが為に建る所なりひと行基菩薩海中より上り大魚の骨とあ
つめて造り給ふ両説ともに殯留霊公が毒魚の祟りとなり毒魚
退治の話い次に記すべし

八十八之水　小西の庄村の街道の傍にあり国中第一の清水なり水源は五丁斗先の山上にて
茶所如来の小堂あり土人宗徒天皇の妻の流といふ

国中に清泉多くして、くも斯る汪澤なる夏なり、多くは亦雅に所謂溫
泉汎泉の類ひにて、正出のなり、此水は波浜泉にして水勢頗る恰
も滝の瀑るゝが如き原素三伏の暑きに清冷にして、斬り如く玄
冬素雪の寒きに温和にして、茶と煙くも難ろ沸れば往来の旅客友
日に客を慰ひ渇を潤ひ、苦熱を避け馬士は馬を樹下に繋ぎて水を飲ん
傍に西瓜素麺心太美淋焼酎などを冷して売る店とぶに行人これを食し
炎暑の労を忘る、此水源とは凡そ五丁ばかり山の奥に入りて湧
出巖穴にして其上に石佛の薬師如来を安置し小堂を霞ふ傳らく、姑に此小堂に
く只石佛のみにして堂を營むことなく堂内の床上に安置せしに忽水出で
出で衆人おどろきて姑の如く石上に下せば水湧出て故に此堂内本尊
の在る所に流れ来る水源の石上なるを以て實に奇異の清泉とぶべしいや

往古悪魚の毒に中たる官軍を救ひ崇徳天皇の御宸奉るの奇瑞也
往古日本武尊西州の蛮賊を征伐の折ら吉備の穴海の荒波に呑舟の
大魚ありて尊出陣の時其行難ふおもれ南海に入く形と涙に沒ん後に蛮
襲と退治し凱陣給ふ舟大魚に還来りて吉備の穴海の前潮波の推
戸に向ふて客艘の結ひとかん尊是を手ばんと鋤を河野の山邑に入く
大本と旁こと繁く翁船と造り尊自らこれを乗じて大魚を刺ふ悪魚
走り逃げ尊の舟と呑む官兵おのく洋風と沒て大魚と斬る是に依て
魚轉倒して南の方福江に流れ船中の人其氣に沒て醉伏る尊一個魚腹
と切割て出給ふこれを見て国吏邑民の門に来りて魚をとりさる官兵
と助け出る時に童子忽然と顕れ一瓶に水を入てたづさへ来りて奉
る尊是を給ふ正に清明なるいと冷く白此水いつの所にか

日本武尊悪魚ヲ退治ス

羅山林先生
日本武尊者
景行帝太子也
西征東伐以平
関国改方業世
其霊為九神

童子を召て此の樵夫の疵傷の水なり尊のたまはく頷くべ吾士卒小も呑め
必死と救ひ給ふらんや童子諾りて邑氏と[illegible]其清水と汲しめて其面を
ぎ其口を呑しむ其毒氣ありて忽ち其毒氣ありて忽ち蘇生放て此水を号て八
十生水とつたへ[illegible]按るに八十生八十八ハヒフヘホの 又云其附官云八十人蘇生
故もつて八十八人生かと[illegible]云へ[illegible]今く附会の説なるべし八十いくつめ
叔亦此童子と云るハ即ち地を横湖明神かしく王道を助け神力を加
給ふ支仰ぐべし尊やがて士卒を従へ陸より給へ浦人殺しく餉を奉
故に此所を御供所と云 今世俗畧して御供所と云 国吏有司群参して其治平を庇び
万歳と唱ふ此時尊の后妃宍戸武媛男子を産給ふ是武殻王なり是庇
び給ひて悪魚を平らげ給ふ功を武殻王の勲とし[illegible]後世留めそ
地を守らしめ給ふ故に国民[illegible]留王と称す

日本書紀曰日本武尊到吉備穴海其處有悪神則殺之
同 二十八年春二月吉備穴濟神及難波柏濟神皆害心以放毒
氣令苦路人並為禍害之藪故悉殺其悪神并開永陸之径
天皇於是美日本武之功而異愛[illegible]下畧
此時彼悪魚とも退治し給ひし物ふらんと又悪魚といるも書紀に云
悪神の変ふらんと
因云北冥に魚あり其名を[illegible]とふ安永年間に来り要人コレ
ーデレキシキンデラル[illegible]と云る書紀伯氏を語りるハ僕小海を漂泊すると
洋中に二の島あり凡圍三里計と見て 紙を岸に着て漂ひ上りたる此外
もなく河水も[illegible]叔紙中より猶金を取よせ[illegible]殿と樂と菓を食し
終り来りて紙に乗り二三十里も走りて大海を乗る[illegible]

と思ひて人を船に波浪きりくと廻りて水中へ沉こむとすれば水中の者驚くと
喫せざるは是傳へ聞北海の大魚【ミコラコス ニュス】ふて彼大魚の胃なる水面へ
浮ひ上と浪と化浮危きめうとなん浪りなをこと吾邦熊夷の海底まく
時と雷の如き鄉音さゆる時海上へ飛とうぶ人なる夷ども周章逃避ること
いろ是おきうとて大魚の海底へ逼る音うるよ【遂に其形】と見る者【は】我と共に
小舟に乗り支元紙三里ばかり其浪人家いもとうふ家床水家いること
【は】時に大風吹おこり臭穢臭と撲こと頻りにく漂ふ腐くもいろ〻れば
者ども船へ跪座り搖と熟視ふ浪ふいあ〻ば〻〻大魚の死〻く
浮びたるこそ有る斯く其臭氣にて〻ての本國へ帰りく後大
熱と發〻く命とおとろふより此病歐羅巴洲中へ傳深さを見彼ふ

於瘟疫と傳へ〻幾りなりと 以上森島中良が紅毛雜話ニ入くう
怨ぶ船と奉く往来と惱ま人悪魚たいぶ〻且前ふいふ魚の御堂の疫瘟の
祝と思ひ合とに全く魚の霊にいろ〻かく〻人ふ臭穢にあうりく瘟疫と化
ひ〻如く彼殺戮せ〻【は】悪魚の腐爛せ〻臭穢那中ふ充滿〻諸人瘟
疫と病と終ふい國中にも傳深く疫病の行き止〻とのならん
水源藥師堂 前ふいく如く八十八の水の傍ニ道いろ〻五丁ばかり山ニのぐる世俗天皇の興況
傳ニ往古濱留霊亞公の御建立ゆく堂塔魏くなる寺院【なり】が後年ニおよび廢
ニ弘法大師ニに登りく求聞持の法と修〻加持〻給ふ此附石佛の茅師の縁と
作り給ひ水の上ニ安置〻給ふ〻我 小さの支い前ニ入る
如〻〻〻ニ畧ニ
此辺りニ一反余の田圃あり堂守の傍のいく〻霊地ふるゆ四人ニ田ニ薫とのこと禁ぶ
霊水自らこにの〻旱ん なく何年も熟〻〻凶作ふ〻と實に天のたをけ給ふ不
神仏の加護とのべ〻山中ニ磐石あり大概白峯の石ニ逼こぶ

崇德天皇社
摩尼珠院

金四ノ四十五

傳云

當社の例祭九月朔日ふる
夏ハ王躰と八十八の水を始て浸し
奉り一日と云ふ事なり云
又高屋村に天皇の社あり是ハ
九月十七日祭礼なり其來由ハ九月十七日
王躰と白峯へ登り奉るなり高屋
おなじく指中より御血ハ出しまつり
其所に御宮と營み血の宮と号ケ
又青海村の天皇の社ハ九月十九日と
以て祭礼を行ふ是ハ白峯におなじく十九日と
茶毘し奉て烟のたなびくを
彼方に宮造り奉て烟の宮と号と右三所とも其縁故
あり云

金山權現祠　水源藥師堂の傍にあり金山彦命と称する金屎彦權現の旧址なり

横鹽明神社　同山中にあり前に云へる如く化現し八十八の水を宮主となし給ふ神なり

天皇社　小西の庄村に有り村中の生土神なり世俗此の通号を天皇と云ふ此社なりと云ふ

八十八の水より一丁余東なり

本社　一座　崇德天皇　例祭九月朔日　神輿渡御あり

拜殿　前に摘接の両樹と左右に楼門

神輿舍　拜殿の左にあり　鐘楼　鼓楼の傍にあり

祭禮用所　鼓楼傍にあり

四脚の鳥居　通例の柱の内招に斜に亦柱あり横木欄干あり

度會延佳神主云左右の柱は女柱男柱と云上の横木は笠木といふ第二の横木を鼓楼といふ此横木に法鳥けづりと掛すべきなり笠木に有とぞ

又延暦年中奏聞の内官儀式此に承背御門といふは今の鼓楼の支なりとなるとかんがへらるべし

此堂は第一上小覆ふ蓋本といひ其下に重なる横木をいく鳥居といふ

正中署扁東に有り其下又横木ありて左右の柱に接通せりこれを欅欄といふ

左右の柱は女柱男柱といふなれば鼓楼の蓋本の下の床の名をとりて此名ありと云

金花山摩尼珠院妙成就寺　天皇の社の左の方にあり四国遍礼七十九番の札所なり

本尊　十一面觀世音　立像長二尺三寸

大師堂　本坊の傍にあり弘法大師を安置

當寺は往昔弘法大師開基にして十一面觀自在菩薩の霊像を安置し法守

金山權現を祭祀し奉りしに長寛二年八月廿六日崇德院崩御ましませ

時金棺を此寺に置奉り國司および供奉の公卿京師へ帰りし間玉体

頓て此を給こんやとて金棺を此沢水に浸し奉りしに忽ち蘇生ましまして宮

殿に帰り神霊を崇め奉るとぞ

福江大師堂　福江村に有り大師十六才の時の像と妻尼御年十二月廿一日死亡の傳云往古

悪魚の孔にて南の方福江につくとつくるべし此本なるべし

惡氏山遍照院松浦寺 高屋村にあり此所は刈ち白峯の麓にして八十番の前れ不社

本尊 弘法大師四十二歳之尊像 大師自作 世俗厄除の大師とのふ

彌勒堂 大師堂左に並ぶ 弥勒菩薩を安ず 十王堂 大師堂の右に並ぶ 閻魔十王を安ず 右三堂とも南面する

方丈客殿本坊庫裏 弥勒堂の左に列る

樓門 四天王を安ず南面

求聞持石 本堂の前にある石垣を廻らす圍む九廻二丈五尺余の巨巖あり

當寺は人皇五十二代嵯峨天皇弘仁六年 空海四十二歳の時在住し給ふ

時に當山鳴動して地中より一の大石湧出る其形宝塔のごと 今佛崇とする

石是なり大師此岩上にいまして國御井を掘び求聞持の法を行ひ給ひ

亦自ら尊容を作りて安置し給ふ是よりして今衆人厄除の大師と称

し此石に向ひて年の悪を免れん事を祈る霊験あらたなりとぞ

白峯城 遍照院の境内なりと云 貞治元年細川清氏官軍に屬し攻破洲波

清後背を絶し此を立籠る此地は刈ち白峯の麓なる尼村にあり四面を尼城と云

三十六騎討死之古址 林田村の庄山の森にあり清氏の良黨三十六騎こゝに討死せり

細川相模守清氏討死之古址 遍照院より西南二丁半許にあり松山田と字す

康安元年十月足利義詮將軍の執事細川相模守清氏將軍と恨る

事あり南方に降る是より南帝大將の印を清氏に揚ふ去程に清

氏貞治元年秋七月四國を討平らげ今一度都を傾け足利將軍と

亡ぼんと五十余騎當國に渡り其威を震ふ此時清氏は白峯の麓に陣

をとゝのふ則ち遍照院の四面皆陣所なりとぞ 細川右馬頭頼之は備中に

在て此由を聞師を帥ひて讃州宇多の津に着し敵を案ず中國は

兵を率して對陣に清氏の勢に比べ頼之の謀を以て清氏は

兵を數て清氏怒て自ら力戦とるの數回にして終に討死を

遍照院
求聞持石

貞治元年細川清氏ら陣を是と
高屋の城とひ白峯の城ともいつれども此辺りハ
一圓の陣所ゆへ且清氏が討死の地も遠からぬ
彼芭蕉翁が高館を妻艸やつはものの夢の跡と
よまれしもこゝと思ひ出しとね

露とくゝ
細川のたえて
散し紅葉ハ
見ゆ
鐘成

討死のいくさ

清氏の陣は白峯の麓より鵜足津にあれば其中間僅に二里ばかり互に隙なく窺ふこと数日に及ぶ頼之の兵士は河波淡岐の通路を絶ち中国の兵士は備前国の住人飽浦雅守信胤といふ者官方になり海上を警固す河波の小笠原美濃守といふ者清氏に同心して海路をも塞ぎしかば宇足津の粮食爾乏しく兵衆日々に減少す清氏の兵威とぞ聞く諸国より加勢する者臣七月廿三日の朝頼之帳帷を出て新開遠江守を呼び行て言て曰当国西庄の騎とんるに敵は日々に増し身方は日々に劣り日数を送ること不計の難もいかゞ今夏を計るに中院源少将西長尾の城に居り是に兵を指向て攻べき形勢とぞ聞く清氏も又兵を分つて城々に其附我兵城を攻べき偽勢とぞ聞く向い城を取て籌を仕ることそく巫道より兵を引き清氏が城ふ寄せ頼之宇足津より出て搦手にむかい少兵を出て敵を

欺く清氏こゝを氣象の者なれば一騎ふたもとせ出べし其こゝに一騎も
なく大敵を破るべしとて新開遠江守に四国中国の兵五百余騎を附て
指遣を路次の在家を大と放ちて西長尾の城ふ向ふ清氏これを聞て
欲西長尾の城を隙し後へ廻らんと計るに中院殿を援べしとて舍弟
左馬助従弟掃部助に千餘兵を附て西長尾の城に向ひ新開遠
くの謀を見て足軽少くして向て城下の在家を放火向ひ陣を取る
る夜を更れば向陣の籌を多く焼捨て巫道より白峯のふもと
清氏の城に押寄る頼之兵を定やる如く廿四日辰の刻に搦手へ向い
先陣二百余騎を二手に分て指向け鬨の声を挙て清氏をとゝろ
我一身の武勇ふ侵る時は我寄手の雑兵を均しく二の木たと
用ゆせふ具足をさも固めず袷の小袖に還をとり取て抱て馬上に

清氏討死

清氏が鋒に廻りの戎を馬に共に庇居に打居ると又曽の鉢胸板までも破付ると四圍の死骸の立とるを嗚呼惜しや清氏自身の武勇に侍て将ら道を失ひ兵卒と用ひられざりしの猛将勇士の運尽く討ると知人更に有く續く助る兵も其身は深田の泥まれ頼朝敵の鋒に伐られ元暦のむし木曽義仲が栗津に

金四人五十

討死暦應二年の秋新田義貞の足羽の纏手にて討れしに異なく主将士卒各其職を守る所著あり

頼之歴祖尊氏義詮屢有軍功細川清氏者一時之勇士也頼之在四国運策策俄攻其城清氏戦死南海漸懐頼之恵洎義詮之指麾也頼之来京師輔翼義滿誘以治道勸以武術明德之役軍謀居多此後兵革寝息足利氏得累洽之福者頼之功業之所為也

上帯しめ喧一騎かけ出せば相徒ふ兵三十余人物具とも聚と固めて
頼之戰列と整くる兵一千餘人中へかけ入て八方に駆ちらし寄手二十余人
清氏が三十余人破らるく人馬ともに辟易す野木備前次郎楠原
孫四郎二人とび清氏馬の前輪に引つけ頸かき切て太刀の先に貫き指上て
唐士天竺の支いたらぬ我秋津洲に於て清氏に勝る勇武の者やある故
も他家の者とあらぬ蓬と師〻く笑るなと言りく只一騎多人の中に駆合る
飽まぐ馬強る打物の達者なれば北と逐て伐落し其辨に廻る者人馬
もに打居らる妻と備中の國の住人陶山三郎と備前國の住人伊賀掃
部助と武人田の中なる細道と辭と引く中清氏追付く伐んと諸證と
合せく独行と陶山が中間傍なる溝に下りく清氏が冑の草摺と突て
その後るれども立とくと成く動ぬ清氏故のるとと奪こんと太刀と逆

に拔突く立りる備中の住人真壁孫四郎馳ちかく一太刀ろく當倒さん
とする所と清氏走りかく真壁と馬より引落し中に指上たるとち伊賀
掃部助高光独合て敵と切く落し清氏と行逢んと東西と眼紙りとる
所と真壁と中に提げ其馬に乗んとする者ろり冗駭くと勇力ある凡夫ふ
有べくんば頼ぶ所の妻ひと畠と巫蓮と馬と駆て清氏と紐清氏と巫と拠拔て掃部
助と射向の袖の下とかく頸とかんと掃部助心早き者ふく紐と均く
清氏が鎧の草摺と上げ三刀と刺さく弱る所と押えく頸と取る
さも名高き勇猛の將なれども一人の武勇と支く続く身方もう衆
治部左衛門尉と給本孫七郎と武人の外に所同孔の者もるく去く

閻伽井

遍照院東南三丁許にあり大師在世の時
弘法大師加持水とりく　弥陀佛教向あり
寺より三丁許東にあり傳云大師水をとりて
突ひしかば忽ち虎わき水ぬけ出く一流もうくりく

底無川

橋　同三丁許正南にあり
弥陀佛教向あり
傳云大師水をとりて
突ひしかば忽ち虎わき水ぬけ出く一流もうくりく

五夜ゞ山嶽 遍照院の正向の山より此山岩崖なる大師この所にて五夜のおこゞ修行しむ
ひ〜夢こ号く〜又大永の比自然庵主とゝなる道人来りて此崖に住しとゝ
雲井御所旧趾 林田村庵氏の宅地に碑あり此家の刈在廉野太夫高遠の後孫〜

保元元年八月三日崇徳院讃岐国松山の津に着せ給ひ〜〜国司未ぞ
御所を造り出さゞりしかれば在廉野太夫高遠の作り松山の御堂に入奉り
せたる上則ち此堂に在廉の擅寺なり此所に三年十ヵ月後敷が岡に移り
せ給ふ此御堂に〜〜縁ませ給ふ御製に
あ〜もまさしらぬ雲井となりゆく空ゆ月の影ぞすみける
これを後に雲井の御所とゝひ又林田の御所ともゝ碑文に旧趾の名を
拾遺の編に委〜〜出ぬ

金毘羅叢書名所圖會巻之四終